

緒明山 OAKIYAMA-TSUSHIN 通信15



絵葉書「海軍通信学校庁舎」(当館郷土資料室蔵)

発行日
令和7年(2025年)1月24日

発行者
横須賀市立中央図書館郷土資料室
住所 神奈川県横須賀市上町 1-61
電話 046-822-2077

本誌は印刷発行していません。
右の二次元コード下のURL
で横須賀市立図書館ホーム
ページ内「デジタルアーカイブ」
にアクセスして閲覧してください。
ダウンロードもできます。



<https://www.yokosuka-lib.jp/contents/archive/>

《 資料紹介 》

『きけわだつみのこえ』と 海軍予備学生「渡邊崇」

郷土資料室 佐藤明生

はじめに

令和7年/2025年は第二次世界大戦(太平洋戦争)終結から80年、更に昭和100年を迎える。本稿はこの節目の年を機会に、本市出身の海軍予備学生「渡邊崇」に関する収集した資料の紹介を目的とする。そして、「渡邊崇」の戦争をとおして平和を考える一助になることを期待する。

渡邊崇氏は、第三期海軍予備学生として通信技術を学んだ後、レイテ沖海戦(ひとう=フィリピン諸島、じゅうじん)で重巡洋艦「鳥海」に通信士官として乗り込み、昭和19/1944年10月27日、21歳の若さで戦死した。

その崇氏の生前の手記が、戦没学生の手記を集めた『きけわだつみのこえ』*1に掲載されている。そこで、この手記の解題をとおして、「渡邊崇」とその戦争について学ぶべき資料の収集を思い立った。

その結果は次のとおりである。

- A) 『きけわだつみのこえ』の出版にあたり、渡邊崇氏の遺族が提供した手記の原本あるいは日記等は、残念ながら所在不明であった。
- B) その代わり、わだつみのこえ記念館*2が保存する手記の「謄写稿」の使用許可を得た。【資料1】
- C) 渡邊家本家から「遺影」と「略歴書」を借用し、それらのデジタルデータを作成した。【資料2】
- D) 渡邊崇氏の弟にあたる渡邊登氏から話を聞く機会を得て、兄の思い出や当時の諸事情を「回想」としてまとめた。【資料3】

以下に、資料1～3を提示し、注釈で補足するとともに最後にまとめを記しておく。

【資料1】 『きけわだつみのこえ』に掲載された「渡邊崇」の手記の「謄写稿」

「謄写稿」とは、手記を転写したガリ版刷りの原稿のことで、『きけわだつみのこえ』出版当時の編集者が作成したものである。ここでは「謄写稿」の画像データを示すとともに、なるべく忠実に文字データ化した*3。この「謄写稿」には注目すべき点の一つある。それは、『きけわだつみのこえ』の出版にあたり不採用になった部分が含まれていることである。不採用部分についてもわだつみのこえ記念館の承諾を得て掲載することにした。

― 出征前、自由日記の一片より ―

ローズマリー*4、僕は嘗て君をロッテ*5と呼んだことがある。しかしまだ見ぬロッテに君の面影を比するよりも、あの白鳥の死*6のローズマリーに比した方が良さうだ。何故なら君はあのマリーにそっくり似てゐるから。

ローズマリー、日本浪漫派*7の連中は悲願といふ文字を使つてゐる。それは永遠の別れなのだ。

ローズマリー、僕は海軍将校になった姿をあなた*8に見せたいな。悲しい事だけど、貴女はきっと喜んでくれるだらう。

でも僕はもう貴女の面影を抱かなければならぬのだ。

僕と貴女と………ローズマリー

悲しい事があつたら貴女を考へよう。貴女のあの微笑を考へよう。

お互いの青春を素直に育てるやう努力しよう。僕はもっと男らしく。貴女はそのまゝでいいや。

― 入團通知を受けた夜、客間にて ―

(以上、「不採用」部分)

不採用

もう何時か逢ふ約束があるかと思へると悲しみの
 氣持はせしさに襲ひ、寂しいやるせない心で流
 滞するより外、仕方がないのです。
 あんなにも僕には豊富であり、ある時にはす
 べてであつた貴女、苦しい通学生活にも希望と
 歡喜を寄せてくれた貴女。
 僕は勤めに征く前に心から貴女に感謝したい
 のです。

「出征前、自由日記の一片より」
 ローズマリー、僕は嘗て君をローズと呼んだ
 ことがある。しかし見た見ぬローズに君の面影
 を比するよりも、あの白鳥の死のローズマリー
 に比した方が良さうだ。何故なら君はあのマ
 リーにそっくり似てゐるから。
 ローズマリー、日本浪曼派の連中は悲願とい
 ふ文字を使つてゐる。それは永遠の別れの代
 名詞に思ひつゝ、僕は海軍將校になつた夢をあ
 んなに見ていた。悲しい事だけれど、貴女はさ
 っと喜んでくれるだらう。
 ども僕はもう貴女の面影を抱かなければなら
 ないのだ。
 僕と貴女と……ローズマリー
 悲しい事があつたら貴女を考へよう。貴女の
 あつた微笑を考へよう。
 お互の意志を素直に育てるやう努力しよう。
 僕はもっと思ひつく。貴女はさうなまゝ、でい
 や。
 ——入道通知を受け取つた夜、窓に向つて——

苦しさも空虚を悲しさも今は銀の小函にそッ
 と秘めて男らしく出発したいと思ひます。けれ
 ど、常に貴女のあの清らかな美しい瞳を感じる
 ことは勿論です。それが僕にひとつの思
 ひ出なのですから、それが僕にひとつの思
 出は僕にはとても出来ません。
 僕と貴女との事は神をのぞいて誰も知らない
 てしよう。それでよかった。それでこそこ
 んなにも美しく悲しい想ひ出となることが出来た
 のです。
 あんなにも僕をせやがせ可愛がつて下さつた
 君——
 貴女は僕の御母様みたいだつた。たつた一度
 貴女の眞剣なきつり眼差に逢つてびくつきした
 ことがあつた。
 あんなの様な素直な表情——笑顔や睫毛をけはも
 く伏せてツンとしていた顔や、眞面目くさつ
 て通り過ぎていつた時のことや今はもう素直く
 優しく悲しい想ひで一ぱいです。
 どうか情ない不甲斐ない僕だと叱らないで下
 さい。あんなにも思つてゐた事がペンを取ると
 もう切つば詰つた噓るやうな悲しみばかりが胸
 を攪つて何にも書けなくなつてしまふのです。
 けれども僕の心の中の文章は神様だけじゃな
 く、くつきりとした貴女のあの白い胸に傳へて下さる
 でせう。
 今の場合、僕にはこう考へるより外に方法が
 ないのです。
 さやうなら、僕のローズマリー、あ、もう永
 遠に逢ふことは出来ないのでせう。
 ——入道前夜記す——

渡邊崇の手記の「膳写稿」(わだつみのこえ記念館蔵)

手記を転写したガリ版刷りの原稿 渡邊崇氏の直筆ではない
 本文のみ紙面に合わせて一部配置を変えた

もう何時お逢ひ出来るかと考へると悲しみの気持は苦しさに變り、寂しいやるせない心で沈潜するより外、仕方がないのです。

あんなにも僕には豊富であり、ある時にはすべてであった貴女、苦しい通学生活にも希望と歓喜を与へてくれた貴女。

僕は戦ひに征く前に心から貴女に感謝したいのです。

苦しさも空虚な悲しさも今は銀の小函にそっと秘めて男らしく出発したいと思ひます。けれども常に貴女のあの清らかな美しい眸を感じることは勿論です。それが僕にとって唯一つの思ひ出なのですからふつりと忘れ去るなんて芸當は僕にはとても出来ません。

僕と貴女との事は神をのぞいて誰も知らないでしょう。それでよかった！ それでこそこんなにも美しく悲しい想ひ出となることが出来たのです。

あんなにも僕を甘やかさせ可愛がって下さった君

貴女は僕の御母様みたいだった。たった一度貴女の眞剣なきつい眼差に逢ってびっくりしたことがあった。

あなたの様々な表情——笑顔や睫毛をけはしく伏せてツンとしていった顔や、眞面目くさって通り過ぎていった時のことや今はもう楽しく懐しく悲し*9想ひで一ぱいです。

どうか情ない不申斐ない僕だと叱らないで下さい。あんなにも思つてゐた事がペンを取るともう切っぱ詰った噓るやうな悲しみばかりが胸を覆って何にも書けなくなってしまうのです。

けれども僕の心の中の文章は神様だけがふっくり*10とした貴女のあの白い胸に傳へて下さるでせう。

今の場合、僕にはこう考へるより外に方法がないのです。

さやうなら、僕のローズマリー、あゝもう永遠に逢ふことは出来ないでせう。

— 入團前夜記す —

注釈(1)

- 1 文献(3)。第一版の発行は1949年10月20日。本稿では当館所蔵の第四版を参照。これら旧版と呼ばれる当初の版では「渡邊崇」、それ以降の新版では「渡辺崇」と表記する。
- 2 《不再戦・平和》を発信するアーカイブ館として戦没学生を主に資料を収集し展示する特定非営利活動法人。

3 「謄写稿」はひらがなによる歴史的仮名遣いで記されている。ただし、「誰も知らないでしょう」のように現代仮名遣いで記す部分や「貴女」と「あなた」、「事」と「こと」、「思ひ出」と「想ひ出」などの混在もみられ、原本どおりか謄写時の筆耕ミスか判断できない部分がある。これらについては「謄写稿」のまま記した。そのほか、「様」は旧字体のほかに略字を含むがすべて旧字体に変換した。

なお、「謄写稿」と注釈1の刊行物では次の2点の相違がある。一つは刊行物では「ローズマリー」を「ローズスーリ」と表記していること。もう一つは活字の使い方で、刊行物では漢字が旧漢字に統一され、拗音・促音は全角とする。前者については原本がない以上は不明である。後者は刊行物全体の統一を図る上での編集と考える。

4 「謄写稿」では「ローズマリー」と記すが、フランス映画「白鳥の死/La Mort du Cygne」の主人公の名「ローズ・スーリ/Rose Souris」に従うべきであろう。ただし、映画を見ると「ローズ・スーリ」は少女である〔Amazon prime videoで視聴〕。「貴女は僕の御母様みたい」、「ふっくりとした貴女のあの白い胸」などの表現とはかけ離れている。

なお、『きけわだつみのこえ』は、光文社や岩波書店が再販を繰り返しているが、版により「ローズマリー」と記すものがあることを付記しておく。

5 「ロッテ」とは、ゲーテ作『若きウェルテルの悩み』に登場する「ロッテ(シャルロッテ・S)」と判断する。最後は自らの命を絶つウェルテルが恋した女性である。

6 「白鳥の死」は、バレエの第一人者が振付指導し、国立オペラ座専属舞踏家や巴里オペラ座交響楽団が結集したフランス映画。監督はジャン・ブノワ＝レヴィ(Jean Benoit-Lévy)。横須賀市内では、「横須賀東宝映画劇場」(現：若松町1-3付近)で、昭和17年2月26日から上映された〔文献(12)より、出典元は神奈川新聞の紙面広告〕。

7 日本浪漫派とは「西欧からの借り物的知性を否定し、民族的美的伝統への回帰を説いて戦中世代に影響を与えた」〔岩波書店『広辞苑』〕。

8 不採用部分では、ここから「君」が「あなた」「貴女」に変化する。採用部分では「君」が1回登場する。両者は同一人格として記されていると捉えるが、謎でもある。

9 注釈1の刊行物では「悲しい」。

10 注釈1の刊行物では「ふつくら」「ふっくり」と「ふつくら」と同じ意味。

【資料2】 「渡邊崇」の略歴

この略歴は、渡邊家に残された「故人の略歴」と題されたA4版用紙一枚に印字されたものの全文である。文体及び漢字と仮名遣いの特徴から崇氏の葬儀の際に故人を紹介するために記した略歴(おそらくは親族が筆書きした読み原稿)を、後年ワープロあるいはパソコンで複製したものと類推する。

故人の略歴

大正 11 年 12 月 2 日 四郎長男として生れ 崇と命名す。

昭和 4 年 4 月豊島小学校に入学、6 年 9 月諏訪小学校に転じ、10 年 3 月卒業す。在学中級長副級長を数次拜命し、学年末には優等生として賞状を授けらる。同年 4 月県立横須賀中学校*¹¹に入校、15 年 3 月卒業す。将来の進路に付、再思の末、東京巢鴨高等商業学校*¹²に進み 18 年 9 月卒業す*¹³。この 2 年の間、専ら自宅より通学しつつ 克く各種勤労奉仕又は動員に 或いは寒稽古、野外演習等に皆勤し、賞詞賞状等を授けられたり。

時 恰も大東亜戦争逐日苛烈となり、学徒出陣強調せられありし時とて 本人海軍予備学生を志願しありし所、同月 30 日電報に接し 席を温むるいとまもなく急きよ武山海兵団*¹⁴に入隊す。猛烈なる軍事訓練、酷烈なる寒風、諸訓育にもよく耐えつつ日曜の家族面会を無二の楽しみとし、母、姉、弟等は本人の慰藉鼓舞激励に努めたり。

かくして薫陶 4 ヶ月基礎教育をおえ、19 年 2 月 1 日 久里浜海軍通信学校に術科修得のため入校、同年 5 月 30 日海軍少尉に任ぜられ、引続き士官学生として通信術研さんに従事中、7 月 1 日軍艦鳥海乗り組みを命ぜらる。待望の第一線勤務祖国鎮護の一礎石ならんとす。軍人志願の頭初に於いて 已に既にきしる処無想の覚悟も新に在南方の全艦指して勇躍出發せり*¹⁵。時に昭和 19 年 7 月 10 日なりき。平素極めて繁忙なる際に克く通信をかかさざりし、従来への慣行に反し爾来ようとして一片だに消息なし。而して同年 10 月 27 日 南方海上に於ける数日に亘る激戦の後、遂に艦と運命を俱にし、ここに散華す*¹⁶。享年 21 年 11 ヶ月なり。辱なくも戦死の報 天聴にたつするや、海軍中尉に任ぜらる。

昭和 21 年 10 月 29 日、秋風一汐身にしむあした、市内良長院より英霊、父の双腕に抱かれ、無言の帰還をなす。

追 悼

玉の緒は 南の海に たえしかと

みたまそろそろ いまかえり来ぬ

かえり来し みたまいだきて ねぎらひぬ

そうるいの涙 うちはらいつつ

やすくにの はしらとねんじ なれるこは
どちらにまつらむ 国と家とに
いとし子の かえらずと思う はかなさよ
かねての覚悟 いまおとづれて



渡邊崇氏の遺影

海軍予備学生用の外套と帽子を着用 背景は久里浜の海軍通信学校庁舎 昭和 19 年 2 月の入校当初の撮影か

注釈 (2)

- 11 現、神奈川県立横須賀高等学校。
- 12 現、千葉商科大学。「将来の進路に付、再思の末」とあるため、巢鴨高等商業学校入学は昭和 16 年 4 月であろう。
- 13 高等商業学校は 3 年制。一般大学と同様に 6 か月繰り上げされ、昭和 18 年 9 月に卒業した〔文献(5)より〕。
- 14 崇氏入団当時の名称は「横須賀第二海兵団」(昭和 16 年 11 月 10 日開設)である。昭和 19 年 1 月 4 日、海兵団の名称に固有地名をつけることになり「武山海兵団」に改称された〔文献(8a)より〕。
戦後は米陸軍「キャンプ・マックギル」となり、昭和 33 年 9 月 19 日に返還されると、陸上自衛隊武山駐屯地、陸上自衛隊高等工学校、海上自衛隊横須賀教育隊などの陸海自衛隊施設が整備されていった〔文献(8d)より〕。
- 15 昭和 19 年 7 月 11 日午後 3 時半、逸見波止場より巡洋艦「摩耶」に乗船し、シンガポールの南、リング諸島とスマトラ島の間に設けられた「リング泊地」で重巡洋艦「鳥海」の通信士官となる〔渡邊家所蔵資料＝手記の展示解説カードか〕。
◇ 重巡洋艦摩耶「19・7・29 リング泊地着」〔文献(4)〕
◇ 重巡洋艦鳥海「19・10・18 リング泊地発。20 日、ブルネイ着」〔文献(4)〕
- 16 崇氏が従軍した「捷一号作戦(レイテ沖海戦／比島沖海戦)」における第一遊撃部隊及び鳥海の戦闘経過を「第一遊撃部隊戦闘詳報」〔資料(2)〕を中心に記しておく。

なお、捷一号作戦は連合国軍によるフィリピン奪還に対抗するための作戦で、捷一号作戦部隊は第一・第二遊撃部隊と機動部隊で編成された。参加兵力は、空母4、戦艦9、重巡洋艦14、軽巡洋艦7、駆逐艦33、潜水艦10である。

このうち第一遊撃部隊は、第一から第三の3つの小部隊からなり、鳥海は第一遊撃部隊の指揮官が乗る旗艦の愛宕をはじめ高雄・摩耶とともに重巡洋艦四隻で構成する第一部隊第四戦隊に配属された。作戦中に旗艦を譲ることになる戦艦大和は第一部隊第一戦隊に所属した。

昭和19年10月18日

- ◇「一八〇八(=18時8分、時間を表す。以下同じ) 捷一号作戦発動」

昭和19年10月22日

- ◇「〇八〇五 1YB(第一遊撃部隊の略号)「ブルネー」出撃(第三部隊を除く)」
- ◇「一五〇〇 第三部隊「ブルネー」出撃」

昭和19年10月23日

- ◇「〇六三四 愛宕敵潜ノ魚雷命中(四本)」
- ◇「〇六五三 愛宕沈没」
- ◇「〃 高雄敵潜ノ魚雷命中(二本)自力航行不能」
- ◇「〇六五六 摩耶敵潜ノ魚雷命中(四本)」
- ◇「〇七〇〇 摩耶沈没」
- ◇「〇七〇〇 第四戦隊(鳥海缺)被害後ノ處置」として、第一遊撃部隊旗艦は愛宕司令官が移乗した駆逐艦岸波を経て、「艦隊旗艦ヲ第一戦隊大和ニ移ス決意ノ下ニ、鳥海ヲ第五戦隊司令官ノ指揮下ニ入レ成ル可ク」などが決められた。
- ◇「〇七三九 旗艦(岸波)→第五戦隊 鳥海ヲ第五戦隊司令官ノ指揮下ニ入ル」

昭和19年10月25日、フィリピン・サマル島沖

- ◇「〇八三〇 鳥海→1YB 今ノ敵ハ敵ノ駆逐艦三ナリ」
- ◇「〇八五〇、進撃中の「鳥海」は左舷中部の後檣周辺に爆弾を受け、落伍、「最初の被害から25分後、(中略)前部機械室に大損害を受け、速力が低下」[文献(11)]。なお、最初の被弾は戦艦金剛による誤射らしい[文献(10)より]。
- ◇「一〇〇〇 1YB 指揮官(前略)被害大ナルモノ鳥海、筑摩、熊野其ノ他調査中」[資料(1)]
- ◇「一〇〇六 1YB 指揮官 藤波ハ鳥海警戒艦トナレ」[資料(1)]

昭和19年10月26日

- ◇「一〇三二 藤波 鳥海全部収容ノ上、(25日)二一四八廃棄艦ヲ雷撃處分「コロシ」ニ向フ」

駆逐艦「藤波」のその後については、「この連絡を最後に「藤波」は消息をたった」、「戦史広報などの公式記録では、「鳥海」乗員を収容した「藤波」は二十七日、ミンドロ島沖で敵空母機群の攻撃をうけ、これと交戦の末、撃沈されたとされる」[文献(11)]。そのほか「早霜の救難に向かう途中ミンドロ島南方で米空母機の爆撃を受け沈没」[文献(6) 第7巻:P331]などの記録がある。藤波の沈

没により鳥海及び藤波の乗組員は全員死亡した。



重巡洋艦「鳥海」の絵葉書(当館郷土資料室蔵)
昭和7年6月30日竣工(三菱長崎造船所)

【資料3】 渡邊登氏の回想

渡邊登氏は渡邊家5人兄弟の末弟である。昭和8年/1933年9月4日の生まれで、崇氏入隊時は10歳であった。聞き取りは令和6年/2024年9月11日、18日、10月10日にわたり計45分ほど電話で行った。

—— 渡邊崇さんは巣鴨高等商業学校を卒業後、第三期海軍兵科予備学生として武山の海兵団に入団されましたが、その頃の崇さんのお気持ちや考えが分かるような思い出はありますか。

登氏 兄貴が海兵団に入団後、外出を許されたときに海兵団で仲良くなった遠方の友人を3人ほど南中里^{※17}の自宅に連れてきたことがあった。友人が帰った後、私を連れて平坂下の教科書を扱っていた書店^{※18}で『日の丸旗之助』^{※19}という本を買ってくれた。そして最後、武山海兵団に帰るときにつぶやいた言葉を忘れない。

「なんで俺たちが戦争しなければならないのか」

—— 巣鴨高等商業学校に進学された理由については何か心当たりはありますか。

登氏 巣鴨に進んだ理由は軍人が嫌だったからではないか。戦争に批判的だった親しい先生がいたようで、決してマルクス主義ではないが、その関係の本も読んでいたようだ。兄貴が武山に入団する前のある日、私が帰宅すると家の中が雑然としていたので、母に聞いたら私服の人たちが来て兄貴の本棚を調べていったと言う。

—— 崇さんはどのような人柄でしたか。

登氏 とにかくおもしろい兄貴だった。仏様の鐘を叩きながら唄を歌ったりしていた。軽音楽が好きで、特に櫻井潔のバンド^{※20}を聴いていた。

—— 崇さんに親しい女性の友達がいましたか。

登氏 分からない。家にいる時の兄貴しか知らない。

—— 『きけわだつみのこえ』の崇さんの手記の最後に「ローズ・スーリ」というフランス映画「白鳥の死」の主人公である少女の名前が記されていますが、この映画について何か聞いたことがありますか。

登氏 日本の映画を見に連れていってくれたことはあるが、「白鳥の死」などの洋画の話は聞いていない。父の職業柄、家では洋画の話はできなかったと思う。

—— お父様のご職業は。

登氏 父の四郎は、横須賀鎮守府の主計科に勤務する職業軍人だった。水兵からのたたき上げの特務士官で、転勤が多かった。宮城県の多賀城海軍工廠^{たがじょう}^{※21}や朝鮮半島の鎮海海兵団^{ちんかい}^{※22}にいたこともある。終戦間際には長門^{※23}の主計長で、最後は東京警備隊だったと思う。

—— 昭和20年7月18日に横須賀に空襲がありました。長門も空爆されましたが^{※24}、その話は聞いたことがありますか。

登氏 それは聞いていない。それから、戦争については人の話を聞くが、自分の考えを話したことはなかった。

—— そのほか、崇さんのことで印象に残っていることがありますか。

登氏 兄貴の葬式は「若くして士官になられて亡くなられて」と、通り一遍のあいさつに始まるようなものだったが、私の心に残るのは母が祭壇の陰で一人泣いていたことである。

—— 崇さんが戦死されたことで、登さんに何らかの影響がありましたか。

登氏 兄貴の気持ちが影響していたかもしれない。私は大学を卒業して一度、東京の民間会社に勤めたが、海上自衛隊横須賀地方総監部の非常勤職員の募集があって、それに応募した。採用されて、その後、事務官の採用試験に合格し、定年まで勤めた。私がいた頃の自衛隊には戦争中のような殺伐とした空気はなかった。それでも上司の話では、海上自衛隊になる前の海上警備隊だった頃、不要になったフリゲート艦の引き渡し^{※25}のためアメリカまで行ったとき、行きは意気揚々としていたものの、帰りは旧海軍の軍人が多かったせい殺伐とした雰囲気になったという。

—— 最後に、登さん自身の体験について、例えば

住んでいた町のことや学童疎開などについて聞かせてください。

登氏 小学校は田戸小学校に入学した。公郷の海軍官舎^{※26}にいた頃で、兄貴もここから巣鴨に通っていた。母が朝2時頃に起きて薪で米を炊いていた。4時台の電車に乗らないと間に合わなかったようだ。学童疎開が始まった頃は、父の転勤で逗子の桜山にいて疎開は経験していない。

不入斗に重砲兵連隊があったのは覚えている。

ほかに横須賀鎮守府の司令長官の官舎^{※27}がある山の続きで、兵隊たちが探照灯を引きずっているのを見たことがある^{※28}。大砲は見えていない。

注釈 (3)

- 17 南中里は旧中里町の一部の地域の呼称である。現、上町4丁目及び不入斗4丁目内。現在でも上町4丁目に南中里町内会館がある。
- 18 この書店は、平坂下という場所（横須賀中央駅周辺）と教科書を扱っていたという点で「信濃屋書店」である。
- 19 昭和14年刊行の中島菊夫作『日の丸旗之助』。
- 20 櫻井潔と其楽団 (SAKURAI Y SUORQUESTA)。コンチネンタル・タンゴを得意とするバンド。櫻井はバイオリンを担当した。昭和30年の第6回NHK紅白歌合戦には歌手の柴田睦陸と共演し、ラ・クンパルシータを演奏した〔Apple Musicより〕。
- 21 多賀城海軍工廠：昭和18年10月1日開庁〔文献(6)より〕。
- 22 鎮海海兵団：昭和19年2月1日設置〔文献(6)より〕。
- 23 「長門」は、捷一号作戦で損傷し11月に横須賀に帰着。昭和20年6月1日、特殊警備艦となり横須賀海軍工廠内の4・5号ドックの北側で、6号ドックの南側に位置する小海^{こかい}と呼ぶ小さな湾の北側岸壁に繋留〔文献(7)、P24の航空写真より。現在の米海軍横須賀基地12号バースに相当〕。
- 24 昭和20年7月18日の空母艦上機による横須賀市内最大の空襲。真珠湾攻撃の旗艦「長門」も攻撃目標の一つ。「長門」では艦長他40人が死亡、横須賀鎮守府関係者の死者は不明、市内の死者は20人〔文献(8c)より〕。「長門」は直撃弾を受けたが沈没を免れた。ただし、アメリカのビキニ環礁での原爆実験に利用され沈没した〔文献(7)より〕。
- 25 昭和26年10月に米国から日本政府に対し、ソ連に貸与していたフリゲート艦の使用について打診があり、昭和28年1月から12月までにフリゲート艦18隻、上陸支援艇50隻が日本へ引き渡された〔文献(8e)より〕。
- 26 旧公郷町21番地に所在（現、田戸台）。崇氏が海兵団入団後に南中里に移ったとのこと。
- 27 現、海上自衛隊田戸台分庁舎。公郷の官舎に近い。
- 28 第一演習砲台（公郷演習砲台）が関東大震災被災後に廃止されたことにより、砲台跡地の一部が米ヶ浜砲台の分観測所になった〔文献(8b)より〕。この分観測所で使用する、あるいは使用した探照灯の運搬を目撃したと思われる。

おわりに ～三つの資料から思うこと～

海軍予備学生と「渡邊崇」

まず、当時の海軍制度^{*29}を踏まえながら崇氏の置かれた状況を探ってみる。

海軍予備学生は、軍備拡充に伴う航空予備員の増員を図るため、昭和9年度に創設された。予備員とは戦時などの有事の際に軍務に服す者である。当初は航空予備学生のみで、崇氏が旧制中学校を卒業した昭和15年3月の時点でも飛行科と整備科の予備学生に限られていた。採用人数も前者がパイロットを志す海軍予備航空団出身者等33人、後者は飛行機整備士を目指す理工系の大学出身者等46人であった。そのため、崇氏が海軍予備学生を自身に当てはめて意識することはなかったと考える。

また、初めて兵役に服すには志願と徴兵検査の二通りある。志願は兵役法施行令で17歳以上徴兵適齢未満、海軍には海軍志願兵令があり15歳以上21歳未満とされた。一方、徴兵検査の適齢は20歳である。ただし、大学等の学校の学生には徴兵延期の措置があり、昭和15、16年度であれば、高等専門学校の場合は24歳まで猶予されていた。登氏の「軍人が嫌だったから」という言葉どおりであれば、旧制中学卒業後に就職すれば20歳で徴兵検査を受けることになる。そのため、進学による徴兵延期に期待したかもしれない。戦時色が強まる中で行く末を案じ、家族とも相談しながら自身の適性をも考慮し「再思の末」、巢鴨高等商業学校への進学を決めたことであろう。

ところが昭和16年10月、海軍予備学生に兵科が増設された。対象は一般大学や高等専門学校などの主に文系の卒業生である。在學生は卒業見込証明書を添付して志願することができた。卒業が3か月繰り上げされ、第一期海軍兵科予備学生の入隊は、日米開戦直後の昭和17年1月である。卒業繰り上げの措置は、昭和17、18年度には6か月に拡大された。

崇氏が志願した第三期海軍兵科予備学生の募集は昭和18年5月末である。飛行科と整備科を合わせた海軍予備学生全体の志願者数は5万数千人におよんだ。その中から約1万人、兵科に限れば3,700人あまりの合格者が10月1日付で入隊した。第二期兵科とその同期の合計が約800人であるから、いかに大量採用を目論んだかが分かる。

入隊後、横須賀第二海兵団や館山海軍砲術学校等で基礎教程を学ぶ。翌19年2月には陸戦・対空・艦艇・航海・気象・機関・通信・電測に分かれて術科教程に入り、同年5月末に終了する。つまり、募集から僅か1年で二十歳そこそこの青年が海軍士官＝少尉

に仕立てられ、戦場に送られたわけである。

更に昭和18年10月1日、一般大学や高等専門学校等の在學生に対する徴兵猶予が停止された（在学徴集延期臨時特例）。それまでの志願とは異なり、全国の学生・生徒を対象に大規模な臨時徴兵検査が国内各地で行われた。甲種と第一・第二乙種^{*30}に合格した学生・生徒は、陸海軍合わせて約10万人といわれる。これがいわゆる「学徒出陣」である。その後、適性検査と学力試験があり昭和19年2月8日付で、海軍では9,730人が予備学生として採用された。

なお、戦没者に限ると第三期兵科とその同期が突出して多い^{*31}。学生に限れば崇氏の世代が最も不運な境遇に置かれてしまったことになる。

「謄写稿」の意義について

「謄写稿」については、「不採用」部分に重要な情報が隠されていた。「君」をゲーテの小説の中の「まだ見ぬロッテ」ではなく、「あの白鳥の死のローズマリー」に似ていると記すことから、崇氏が映画「白鳥の死」を見ていたのは確かである。更に西欧の文学や映画に触れやすい学生生活を送っていたことを物語る。日本浪漫派を否定することを含め彼の嗜好や思想の一端を垣間見ることができよう。

また、自ら戦争に加担することに納得しない崇氏の心は手記全体に感じられ、登氏の「回想」でも明らかである。そのため戦局の悪化に伴い、海軍に志願せざるを得ない状況を頭で整理しつつも、決断に至るまでには並々ならぬ葛藤があったと思われる。

「略歴」と「回想」

渡邊家の「略歴」と登氏の「回想」からは、特に母の背中が見えてきた。崇氏自ら「苦しい」と告白する通学生活は「専ら自宅より通学」していた。それを陰で支えたのは、未明のうちから朝食の支度を始め、おそらくは弁当を持たせていたことであろう母の存在に他ならない。手塩にかけて育てたにも関わらず戦争で命を奪われ、「祭壇の陰で一人泣いていた」母にとって、名誉ある死などの言葉はなんの慰めにもならないと思うが、心の内は計り知れない^{*32}。

登氏の探照灯運搬とフリゲート艦輸送の話は、戦中戦後の諸事情を捉えた描写として興味深かった。一個人の記憶の断片で、本市の通史を書き改めることにはならないが、通史を裏付け、肉付けする情報として記憶にとどめておきたい。このような小史を物語る記憶や記録がまだ市中に眠っていることを示している。それ故に資料の発掘^{*33}に終わりはない。

* * *

以上、異なる性格の資料、つまり心情を綴った手

記、具体的な略歴、親族の回想を通じて、「渡邊崇」という人物像とその手記の背景に少しでも迫ることができたと思う。更に一人の海軍予備学生に焦点を当てたことで、戦時における学生像を網羅的に解き明かす手法では表面化しにくい、細かな事象も紹介することができた。

文学的な表現かつナイーブな感性で綴られた手記は、『きけわだつみのこえ』の中でも異彩を放っている。死を覚悟していたとはいえ、まだ戦争を客観視していたようにも感じられた。また、当時の青年の普遍的な価値観が表されていると言い難く、海軍士官が約束された海軍予備学生というエリートらしさも見受けられた。手記に接した当初の「渡邊崇」はこのようなイメージに基づくおぼろげな存在であったが、略歴と登氏の記憶を紐解くことで、戦争と向き合う青年にようやく出会うことができた。さながら「白鳥の死」のごとくモノクロ映画の中に現れた「渡邊崇」は、「なんで俺たちが戦争しなければならないのか」と、問いかけている。

注釈 (4)

- 29 海軍制度については文献(5)・(6)を参考とする。
- 30 身長や骨格の程度に応じて、甲種、第一・第二乙種(現役兵)、第三乙種(補充兵)、丙種(国民兵役)、丁種(兵役免除)に区分した(昭和14年11月改正、「兵役法施行令」第68条)。
- 31 文献(5)に掲載された戦没者名を数えると、第三期兵科及びその同期の飛行科・整備科の合計は2,376人、学徒出陣組の合計は847人である(いずれも海軍のみ)。
- 32 崇氏の甥、渡邊真宏氏は祖母(崇氏の母)から「崇は通信の仕事をしてながら船とともに海に沈んでいったんだよ」と聞かされていた。そこには名誉の死という無念と悲しみを乗り越え、いつしか通信士官の道を選んだ息子を称える心の変化がある。真宏氏は「名誉の死は、時を経て死を受け入れるための一つの手段になるのではないか」と話す。
- 33 資料の発掘とは考古学の発掘を含めて、求める未知の資料、存在が予測される資料の探求である。更に新たな研究視点による再分析や葬られていた資料に光を当てることを含む。つまり、発掘する者と資料との間に介在する何らかの隔たりをなくし、歴史叙述するための資料を得ることである。

謝辞

本稿は、海軍予備学生「渡邊崇」に関する一つの問い合わせをきっかけとし、その後の一連のレファレンスを通して「渡邊崇」を巡る輪が広がり、ここに紹介した資料や情報を授かるに至った。

まず、千葉商科大学同窓会理事の藤山幸一氏に感謝する。「渡邊崇」並びに巣鴨高等商業学校について有益な情報が得られた。更に原科幸彦学長をはじめ千葉商科大学からは図書や資料の寄贈があり、同校の教育方針についても理解を深めた。旧「三高商」の一つ高千穂高等商業学校につながる高千穂学園の同

窓会事務局新井正氏からも図書の寄贈を受けた。

渡邊崇氏の甥にあたる渡邊真宏氏に感謝する。崇氏の写真と資料の借用並びに『緒明山通信』への掲載に快諾され、更に渡邊登氏に話を聞くことを薦めてくれたことで本稿執筆の目途がたった。渡邊登氏とご家族の皆様には電話での取材にあたり大変お世話になった。

わだつみのこえ記念館の法人理事長渡辺總子氏の丁寧な対応と助言に感謝する。「謄写稿」の使用については同記念館から便宜を図っていただいた。

これまでに多くの縁を築いて数多くの御指導、御協力を賜った皆様に心から御礼を申し上げます。

引用・参考文献、閲覧資料等

- (1) 「第一戦隊戦闘詳報第二號 自昭和十九年十月十八日 至昭和十九年十月二十九日 捷一號作戰」 アジア歴史資料センター：C08030036900、C08030037000
- (2) 「第一遊撃部隊戦闘詳報 自昭和十九年十月十六日 至昭和十九年十月二十八日 捷号作戰(菲島沖海戦ヲ含ム)」 アジア歴史資料センター：C08030714600、C08030714700
- (3) 日本戦歿學生手記編集委員会編 1950 『きけわだつみのこえ 日本戦歿學生の手記』(第四版) 東大協同組合出版部
- (4) 落合康夫 1976 「重巡鳥海・重巡摩耶」行動年表 『丸スペシャル No.4 重巡鳥海・摩耶』、P38-39 潮書房
- (5) 小池猪一 1986 『海軍豫備学生・生徒』全3巻 (株)国書刊行会
- (6) 財団法人海軍歴史保存会 1995 『日本海軍史』全11巻 第一法規出版株式会社
- (7) 横須賀市 2005 『占領下の横須賀 一連合国軍の上陸とその時代』 横須賀市
- (8) 横須賀市 2012 『新横須賀市史 別編 軍事』 横須賀市
 - 8a 田中宏巳 2012-1 「海兵团」 P248-249
 - 8b 原剛 2012 「演習砲台(米ヶ浜、公郷、深田、田戸、小原台、花立)」 P637-640
 - 8c 高村總史 2012 「横須賀空襲」 P672-674
 - 8d 栗田尚弥 2012 「キャンプ・マックギル(Camp McGill)」 P734-735
 - 8e 田中宏巳 2012-2 「海上警備隊と警備隊」 P766-768
- (9) 柳生悦子 2014 『日本海軍軍装図鑑 増補版』 並木書房
- (10) 石丸法明 2015 「レイテ沖海戦の真実⑥ サマール沖の誤射事件」 『丸』2015年4月号、P193-205
- (11) 諏訪繁治 2020 『重巡「鳥海」奮戦記』新装版(光文社NF文庫) (株)潮書房光人新社
- (12) 水島和明 2020 『横須賀の劇場・寄席等の興行記録(明治～昭和20年)』及び同『図版集』 私家本
- (13) 藤山幸一 2024 「随筆 学徒(続) 渡辺崇先輩」 千葉商科大学同窓会情報誌『きずな』第44号

あとがき

当郷土資料室では、今回のようにテーマを定めて資料を発掘するほか、過去の収集資料の再検証でも新たな発見に遭遇することがある。また、資料所蔵者の申し出により小史の隙間を埋める資料に出会うことも多い。発掘した資料は企画展示会に合わせて紹介するよう努めている。また、『緒明山通信』への掲載を含めて当図書館のホームページ内デジタルアーカイブなど Web 上での公開では、広く一般の知的好奇心にこたえ、活用していただけるよう工夫している。乞う御期待。